Vol. IV, Pt. 1, 1953

蝶と蛾

BUTTERFLIES AND MOTHS

(The Transactions of the Lepidopterological Society of Japan)

国蝶の弁

江崎悌三

A chat on the "National Butterfly"

By Teiso Esaki

かつて蝶類同好会で日本の"国蝶"を選定しようとしたことがあつた．そのときオオムラサキが国蝶として圧倒的な支持を受けたのではあつたが，正式に国蝶と決定したわけではなかつた．それでもその後この蝶が国蝶として取扱われたことは再三に止まらないようである．このことはそんなに古い話でもないが，戦後派の諸君には不案内な方もあると思われるので，緒方さんからの御依頼によつて国蝶論を一席申上ることにする．

国蝶とは何か？

日本の国蝶を選んだらどうかという話は昭和8年4月12日に東京で開かれた蝶類同好会の懇親会の時に，私が言い出したのである(Zephyrus, 5: 51, 1933). そのときの大体の経過はZephyrus, 5:161－162, 1933にある通りである．"国蝶"というのは一国の象徴にふさわしい蝶の意味であるが寡聞にして外国に既にそういうものがあるか否かを知らない．しかしドイツの *Parnassius apollo* などは，国蝶のような代表的な蝶となつている．アメリカの各州には州花や州鳥があり，日本の国蝶を提案する少し前に，アメリカでも蝶の特に豊富なCalifornia州では州蝶の選定を行い，結局Dog headという名で著名なシロチョウ科の *Zerene eurydice* Boisduvalが州蝶に選ばれた(Pan-Pacific Entomologist, 6: 88—90, 1929). もともと国花にしても，中華民国などのように法令で定められているのは稀であつて，多くは昔からの伝統でそうきまつていて，必ずしもやかましく議論した上で

決定されているものではない．日本の国花にしても，或はサクラであると言い，或はキクであると言うわけで，どちらが正しくて，どちらが贋というわけでもなく，一般にどちらも受け入れられている．国蝶を選んだところで一般に受け入れられなければ，結局は有名無実に終るであろうし，オオムラサキの如きは会では正式に決定こそしなかつたが，実質的には相当に広く容認されていると見ていいのである．しかし蝶は花のように一般の人達にはあまり深くは認識されてなく，普通の人達の蝶の識別力は"黄色い蝶，白い蝶，大きな黒い蝶"と言つた程度から，"アゲハの蝶，モンシロチョウ，その他"位が関の山であるから，国蝶がきめられたとしても，それを受け入れる一般の人と言つても，それは結局蝶の愛好家

California 州蝶の印章
(Pan-Pacific Entomologist,Vol. 6からとる)

が主になる，われわれが，国蝶をきめようと思い立つたことも，何もそれを国民全体に知らせて承認を求めたり，法令で正式に認めて貰つたりしようと言うのではなく，たゞわれわれ愛好者がそれで楽しければ満足なので，今後再び国蝶問題が起つて，どれかの蝶にきまつたとしても，私達の国蝶に対する感情は変りないのである．

戦後日本で“国鳥”としてキジが選ばれた．これは昭和22年3月22日の日本鳥学会の会合で決定されたのであるが，それは鳥学会が自主的に行つたのではなくて，文部省が愛鳥運動に関連して国鳥の指定を思いつき，その選定を同学会へ依頼したもので，言わば官製のもので，その目的も“不純”であつた．キジであれば一般人にもよく知られているので，その宣伝価値もあるが，国蝶の場合はあくまでもわれわれが楽しみできめるのであつて，それ以上の“野望”をもつべきではない．

国蝶選定の経過

国蝶を選んではどうかという私の提案はその時出席の会員諸君から大賛成をもつて迎えられ，その会合で次のような提案があつた．

中原和郎博士は第一にオオムラサキを提案された．その理由は (1) 最も華麗で世界中どこへ出しても恥しくない，(2) 北海道から九州まで，更に当時の勢力下にあつた朝鮮，満洲，台湾にも分布する．加藤正世氏はこの蝶の属名が日本人の名に因む（*Sasakia* は佐々木忠次郎博士に基く）ことを同蝶支持の一理由とし，また河田党氏から賛成演説があつた．これに対し山階芳麿侯爵はミカドの名あるミカドアゲハも候補者の一つとして提唱された．ギフチョウの名も話題になつたが，近縁の西部支那の *Armandia* に比べるととても太刀打出来ないし，名和昆虫研究所でお先にマークに使用しているので面白くないという意見も出た．オオムラサキが外国でも日本の蝶の代表となつていることの一つの資料として，イギリスの John Player & Sons で発売の煙草 Navy Cut のカード集 “Butterflies British & Foreign” の50種の世界の豪華蝶の中に日本の唯一の代表者としてオオムラサキの描かれているのが回覧された．

この中原博士提案のオオムラサキは当日出席しなかつた会員23氏の支持を受け，これに反して反対は一つもなかつたので (Zephyrus 5: 344—347, 1934), 国蝶は殆どオオムラサキに決定しかけたのである．ところがその直ぐ後に結城次郎氏の“「国蝶」を如何に選ぶべきか”という大論文が提出され，氏はオオムラサキに反対して，アゲハを候補者として提案された (Zephyrus 6: 146—149, 1935). 同氏の所論は流石に数学の先生だけあつて堂々と論理的に議論が運ばれている．今までオオムラサキについて挙げられた4つの理由は一応認めるが，国蝶の選定は順序としてまず国蝶として条件を定め，次にそれに適合するものを探し出すのが正しいのであるとし，その条件として：

“1．我が帝国の領土並に我が勢力の及ぶ地域に普く分布し，然かも其個体数多くして容易に観得る種であること．”

“2．名称，形態普く知れ渡り尠くとも小学校国定教科書並に男女中等学校博物（理科）教科書に採録せられてゐる種なること．”

“3．大型にして色斑紋鮮明，一見極めて明朗なる感を与へ且つその飛び方も蝶らしき優美の態を具へ，然かも総ての点に於て日本的なる感じを与へる種なること．”

を挙げ，各項について論議の結果，この3条件によく適合するものとして，アゲハが随一であることを強調した．同氏は第2条件にある小学校国定教科書に載つている蝶としてアゲハとモンシロチョウとを挙げたが，これはその後調査して見ると皮肉なことにアゲハ

は載つていないが，オオムラサキはその頃の国語の読本の中に図と共に掲載されていたのである．

この爆弾的提案に対し，中原博士の反駁論と，野平安芸雄博士や平岩馨邦博士の支持論が出た(Zephyrus, 6:383—384,1936)．中原氏は駁論の中で，"柑橘類の害蟲として国蝶を駆除しなければ成らぬとあつては由々しき大問題ではあるまいか？"と痛い所をつき，また"余りにも外国の同類の前で頭の上らない平凡蝶は，日本国蝶としての資格はない"ときめつけた．

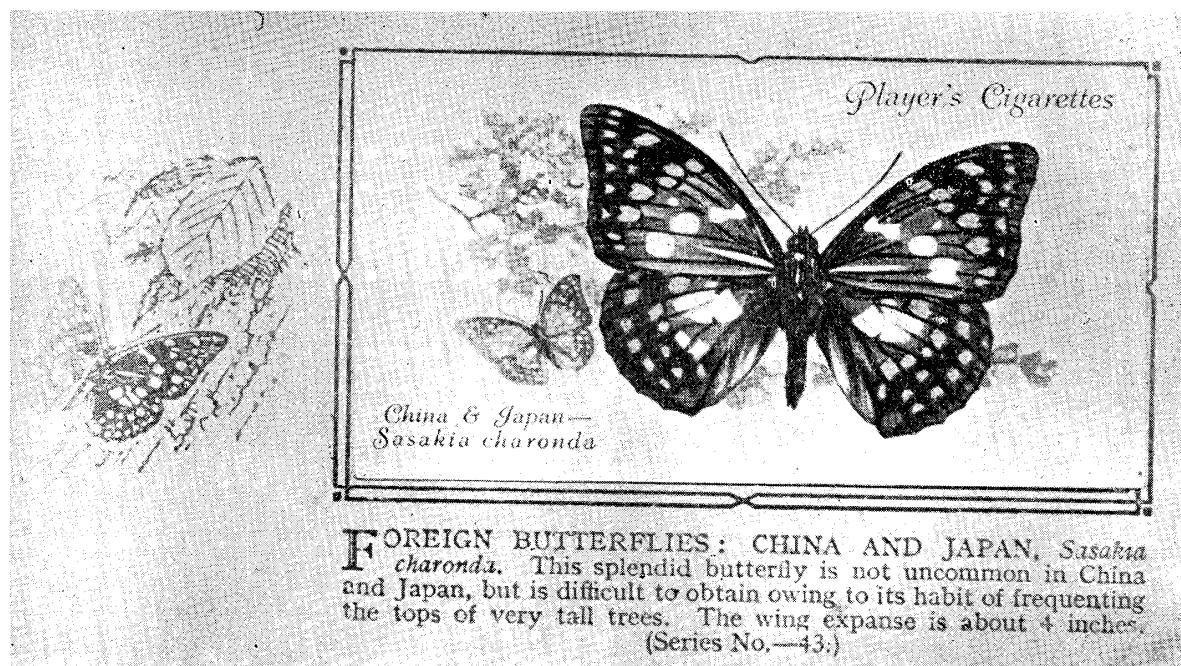
アゲハ論者の結城氏にしても野平博士にしても，同博士の言葉を借りて言えば"「日の丸」と共にアゲハを国蝶に選ぶ事はたゞ選びさえすれば国民の賛同を得る程のものかと存居候"とあるように国蝶である限り国民全般が支持するものであることを前提とする観点に立つている．この点最初に述べた私が提案したときの考え方とは著しく隔つているのである．国蝶が国民全般から支持されるためには，蝶の知識が今の何万倍かの範囲に普及しなければ困難であろう．またそうなれば，その前に日本の蝶は濫獲されて今の何百分の一かに減つて了うであろう．

蝶類同好会では殆ど決定しかけたオオムラサキに対して結城氏の投げた波紋が大きく拡がつたので，ついに会員全体の記名投票によつて決定するという民主的方法をとつた．投票数が全会員の半数以上であることを必要とし，有効投票数の過半数を得たものを当選とし，当選者のない時は最高のもの2種につき決選投票を行うこととした (Zephyrus, 6: 382—383, 1936).

投票の結果は会員数399に対し投票数 107 (無効6)で過半数に達せず，従つて会として国蝶選定は行わなかつたが，その結果は次の通りで，投票数の範囲ではオオムラサキが過半数を占めた．

オオムラサキ　75　(外に締切後到着3)
アゲハ　34　(　〃　1)

その外にアサギマダラ，ギフチョウ，アカボシウスバシロチョウ (無効) 各1票があつた (Zephyrus,7: 90—92, 1937).

そんなわけで，結局正式の選定は行わなかつたが，世論の趨く所は上の数字から見て自ら明らかであろう．それが反映したためか，或は決定したかの如く伝えられたためか，私はその後に"オオムラサキが国蝶である"と記された記事をいくつか散見した．ここにはその中のただ一つ国際豪華雑誌 (英，独，仏，西語) Nippon の第20号 (1939年11月) ("Japanese Mind and Spirit" という特輯号) の中に"自然界の四重奏" (Quartet in Nature) と題して，菊，オオムラサキ，鮎，ルリカケスの四つの生物がおのおの27×37cm²の全

英國タバコカード "Butterflies British & Foreign" の中のオオムラサキの圖

頁を占める豪華な原色版で紹介されていて，その説明に “For its strength, beauty and dominating size, the *ōmurasaki* has been voted the national butterfly of Japan” という書き出しで，英語とスペイン語で説明されているのを御紹介して，この稿を終りたい．この記事は無名で，私は執筆者が誰であつたか知らない．

KOKUTYOO NO MONDAI MUSIKAESI

Sibatani Atuhiro

Mukasi mukasi kokutyoo no koto ga Esaki sensei kara iidasarete Ito-Syuusiro ya watasi nado mo uresigatta mono desita. Ano koro wa **Oomurasaki** no hoo ni sansei de, Zephyrus ni nagai hanasi o kaite Nohira san kara hantai sareta koto ga arimasita. Sikasi tukihi no nagare to tomo ni watasi no kangaekata mo dandanto kawari, genni ima watasi wa tyoo-atume wa site orimasen. Sore to tomoni mukasi no **Oomurasaki**-netu nado doko e yara, ima dewa *Sasakia charonda* nado doko ga kirei de utukusii ka, to sae omou yooni narimasita. konna koto o iu to kondo wa Nakahara sensei ni okoraresoo desu ga … Nakahara sensei to wa sononoti betuna hoomen kara siriai ni narimasita ga ……, zissai **Oomurasaki** nante, hen ni yabo de inkikusai, hentekona tyootyoo da to omoware masen ka? Sorya, **Kootookisitaageha** to kurabetara, onazi kurozi no tyootyoo demo, dotira ga kirei ka sugu kimaru desyoo. Sorede, ima mosi karini kokutyoo ni tuite iken o motomerareta to sureba, mondai naku **Ageha** ni sita koto to omoimasu. Sosite ano koro **Ageha** ni sansei sareta kata ni hisokani sonkei no kimoti o harau mono desu.

1953n. 4gt. 8nt.

紹　介

はなやかな国蝶論の頃をかえりみながら，ひとりの戦前派の談話を要約して紹介いたします．

“………オオムラサキアゲハかの論争，かんかんになつていながら，いちめんじつにのんびりとしてました．いまごろの雑誌にはそんな余裕がないのでしようか．オオムラサキというなまえ自体，ロマンチツクなひびきがありますね．なまえそのものだけが充分あこがれの対象になる価値をもつてます．外国の蝶とはいえアケボノアゲハなどいい名がついてます．じつに感覚的でそのものずばりですね．それにしてもちかごろの蟲屋さんたちはどうしたものでしよう？　蝶や蛾に限らずコチコチの和名をつける傾向がありますね．アケボノアゲハをかりにウラアカオモテウスグロアゲハなんて呼んだらとんとつや消しですよ．ひとつタソガレナミシヤクなんていう新種を発見しては如何．ほかの学問には law of recency があるんですが，博物学ではだめでしようか？　でもオオムラサキという名はだんぜん保存すべきでしよう．国蝶の論争のようなおもしろい論争がつぎつぎとあらわれたら，みんなの意気があがるでしようね．行きづまりの状態なんてぜつたいになくなるでしよう．だから博物学はどろぬまだということになりますけれども．…………”

(文責編集者)